

ビジネス／ 技術アイデアコンテスト 表彰式

イベントレポート



大阪・関西万博の「最新技術」が「知財」に変わる！ ビジネス／技術アイデアコンテスト表彰式レポート

硬さが変わる液体金属、一滴の汗から感情を読み取るセンサー、空間に触れられるVR——大阪・関西万博で展示された「未来の技術」を体験した学生たちが、その学びを自身のアイデアに変えて競い合う。そんなコンテストの最終審査会が、2026年2月21日、大阪・梅田の日本弁理士会 関西会事務所で開催されました。

「ビジネス／技術アイデアコンテスト」と題された本イベントには、全国から約220チームが応募。その中から選ばれた中学生から大学生までのファイナリスト10チームが、最先端技術と「知的財産」を武器に社会課題に挑みました。大人顔負けのプレゼンテーションが繰り広げられた当日の様様をレポートします！

大阪・関西万博の技術体験が、アイデアの種になるまで

このコンテストの最大の特徴は、実際の技術体験に基づいてアイデアを創出する点にあります。2025年10月3日から10日までの8日間、大阪・関西万博会場EXPOメッセ「WASSE」にて、富士通株式会社や株式会社栗本鐵工所、国立研究開発法人情報通信研究機構など計12社の企業・研究機関が先端技術を出展。参加者は1社あたり15分×4社、計1時間にわたって最新技術を体験し、その後、弁理士とともに約1時間のワークショップでアイデアを深めました。

さらに注目すべきは、万博当日だけで終わらないことです。参加者は「事前学習→技術体験→ワークショップ→事後学習」という段階的なプログラムに取り組み、各グループに配置された弁理士が継続的に伴走。アイデアの創出だけでなく「そのアイデアにどんな知的価値があるのか」「どうビジネスや社会実装へ発展させるか」まで、実践的に学べる仕組みになっていたのです。

こうした手厚いサポートがあったからこそ、中学生から大学生まで幅広い世代が臆することなくできた挑戦。最終審査会のプレゼンテーションは、その成果を存分に感じさせるものでした。

「言葉にできない感情」を読み取る。学生が見つけた社会課題



日本弁理士会会長 北村氏



プレゼン中の参加者たち

開会にあたり、日本弁理士会の北村会長は「大阪・関西万博のテーマは『いのち輝く未来社会のデザイン』です。未来社会は若い皆様がデザインして築いていくものです」とエールを送りました。

ファイナリストたちが万博会場で体験したのは、まるで魔法のような最新技術ばかり。しかし、もっと驚いたのは学生たちの「着眼点」でした。これらの技術をSFチックな夢物語ではなく、現実的な社会課題の解決策へと昇華させていたのです。

最優秀賞に輝いた「東西おじょー」チームが目に向けたのは、赤ちゃんや重度の障害を持つ方など「言葉を発せない人々のコミュニケーション課題」。精神的な刺激による発汗の成分から感情を読み取る肌着「感情ソムリエ」を提案しました。「何に苦しんでいるのかわからない」という介護現場や家族の精神的負担を、技術の力で優しく取り除きたい——そんな愛にあふれたアイデアです。

日常の身近な困りごとから出発したチームもあります。アイデア賞1位の「KC Nyls lab」チームは、学校で履いている指定のナースサンダルが「すぐに壊れる」「取り違えが起きる」というリアルな不満から出発。中学3年生136人を対象にアンケート調査を実施し、壊れにくくデザインを変えられる「トリプロテクト・シューズ」を提案しました。

「ナースサンダル1つでこれだけ課題が出てくるとは……！」と審査員から感嘆の声が漏れた質疑応答。さらに「まだまだ課題はある」と語るメンバーの姿には、発明のタネは日常のすぐそばに転がっているのだと気づかされます。

特許だけじゃない！「知財ミックス」でアイデアを守り抜く



本コンテストが一般的なアイデアソンと異なるのが、弁理士の協力を経て、「どのように権利として守り、ビジネスとして成立させるか」まで深く練り上げられていた点です。

ここで会場を特に唸らせたのが、優秀賞を受賞した「獨協宮川ゼミ」チーム。彼らが提案したのは、寝返りなどの姿勢変化に合わせて全自動で最適な形に変化するスマート枕「くりまくら」です。人生の3分の1を占める睡眠の質を向上させるプロダクトですが、彼らの強みは「知財戦略」にありました。

特許、意匠、商標を組み合わせた見事な知財ミックス戦略の発表には、特許庁や近畿経済産業局、弁理士の審査員たちも身を乗り出しました。質疑応答で「知財ミックス戦略を立てる上で苦労した点は？」と問われた学生は「特許権などは知っていたが、複合的に組み合わせてアイデアを守るという発想が一番難しかった」と回答。まさに弁理士との学習を通じて知財という武器を確かに手にしたことが伝わってくる、印象的な場面でした。



他のチームも負けていません。MR流体を車のボンネットに応用し、衝突時に歩行者の骨格を検知して局所的に柔らかくなるシート「Mr.GEKIGEN」を提案した「鹿児島高专マクリティック」チーム

は、「自分を守る装置ではなく、相手を守る安全装置」という独自の視点でビジネス戦略まで組み立てていました。

知財で守り、知財で育てる。未来を創る学生之力



閉会の挨拶では、大阪・関西万博対応委員会を担当する日本弁理士会の小澤副会長が「皆さんの知財に対する意識がすごく進んでいることに心強さを感じた」と総括。ファイナリスト10チームを選ぶ段階でも大いに苦勞したことを明かし、参加者全員の健闘を称えました。

「技術は知的財産権で守られ、育てていくものです」

冒頭で北村会長が語ったこの言葉の通り、どんなに素晴らしい技術やアイデアも、適切に保護されなければ社会に根付かせることはできません。弁理士は、クリエイターや発明家の想いを法的に守り、ビジネスの成功へと伴走するパートナーです。

最新技術に目を輝かせ、知財戦略を堂々と語る学生たち。その姿を見ていると、日本のイノベーションの未来はきっと明るい。そう感じられた、熱気あふれる一日となりました！